

風土



子規忌
神蔵器

くれなるは子規居士のいろ曼珠沙華

子規庵のどの糸瓜にも眼の届く

生きて会ふ子規の糸瓜と味噌甕と

子規居士は最後の土葬小鳥来る

たましひに火のつく子規の鶏頭花

かりそめにあらざる九月十九日
身に入みて子規の写生画十二枚
西国や歩くりズムに曼珠沙華
つぶやけば七十九歳紫苑咲く
わがためにわれが点して秋灯
底紅や M R I 室を出て
こころざしありて南蛮きせるかな



竹間集

同人作品



夜の秋

蓮尾あきら

あるほどの星をあつめて土用波
青葉木菟夜ごとなかれて眠りけり
吾が航く海を仕切りて雲の峰
すいと来てわが足もとのあめんぼう
ペン皿は備前の小壺夜の秋
雀らは跳ねころびをり芙蓉咲く
ふるさとはあによめひとり夏灯

送り火

鈴木とおる

なぐさめの畑の物炊く盆三日
銀行印忘れて戻る残暑かな
供花の菊こぼれてをりぬ夜の秋
施餓鬼会に僧六人の経の満つ
つくつくしひとりのための米を磨ぐ
納棺に一切づつの新豆腐
送り火に別れの雨となりにつけり

奥信濃

外川 玲子

黒姫も妙高も晴秋立てり
避雷針の先に一茶の空の秋
ゆふぐれの山河退く夏の果
岳空（山岳）にリフトの消ゆる秋桜
弥太郎のみさうな里の盆の月
赤とんぼ一茶の風に乗りにつけり
秋暑し未完の一句もちあるく

鬼の里

— 浜 福恵 —

八朔の雲 従へて 猿田彦
神々に 秋の祭の 出番かな
神住まふ 山の椎の 実拾ひ来ぬ
露けしや 天あま鈿のづめ女の 神楽石
一本の川 引締むる 帰燕かな
紙漉を 守る一戸や 水の秋
幟立つ 平家の里の 走り蕎麦
中鬼が茶屋 三句ン茶屋 鬼ガ茶屋へと 色の秋
仏性寺 平を越ゆる 百舌のこゑ
鬼退治 絵巻 八段 襖 立つ

冷まじや頼光を噛む鬼の首
風の谷毛原に稲の穂波かな
きちきちばつた群るる棚田や六地藏
尾根二つ跨ぎて丹波太郎雲
鴟の贄千丈ガ原に迷ひこむ
鶺鴒の飛翔の高き童子橋
山また山鬼へ供養のひよんの笛
神を祀り鬼を祭りて山の秋
天高し棚田の裾のログハウス
葛咲くや鬼が遠出の与謝峠

山河集

同人作品



神蔵
器選

肉筆の棟方志功美人図水蜜桃
海を見て逗子駅前に小鯨買ふ
午前十時愛深めゆく酔芙蓉

安永 圭子

皇居

掌に受けて噴井に力ありにけり
一本の線香花火のものがたり

柿沼 盟子

日当たれる累の墓や百日紅さるすべり
夕立の向かうの空の焼けてをり
バーコード読み取る音や日の盛り
呪文にも飛ばばぬ絨毯油照
山下る蜻蛉の群と擦れ違ひ
夕立の序の大粒を頬に受く
手裏剣のごとき流星山を打つ

柴田 久子

星走る丸太造りの酒場かな
つくつくし漢字パズルの柀目埋む
台風の目を抜け来たるフアクシミリ

鈴木 庸子

白樺を焚いて信濃に魂迎ふ
ころがせて集め逃らる芋の露
自分の名言へる子となるゆかたかな
すぐそこと言はる道程秋暑かな
火の山を鎮め降りくる赤とんぼ

島田 和子

蜻蛉に空明け渡す甲斐路かな
露草や思ひ思ひの丈に咲き
豆挽きをゆつくりまはす終戦日
百日紅草加煎餅三代目
はたた神電車を停めてしまひけり

波郷の山河

林 いづみ

浅春の忍冬亭の跡に佇つ
旧谷原村の寺領や地虫出づ
春の雪風鶴居士の肩にかな
春禽や一木となる墓の前
きさらぎの砂町日向ありにけり
東風吹くやモノクロ写真と取材メモ
惜命の稿の朱筆やあたたかし
凶書室の一画波郷亀鳴けり
春の土葛西橋より下りてみし
葱坊主光陰追うてゐたるかな
烏雲にかつて清瀬の療養所
木の股の探検基地や下萌ゆる
プラタナス大樹の影の黄蝶かな
親雀小雀に垣はぎ生小學校
母恋ひの句碑にあつまる飛花落花



第 29 回桂郎賞俳句部門入選

余土村へ続きし路や花は葉に
波郷句碑たどるは遍路行に似て
百千鳥古郷波郷の山河かな
南山房の緑泥偏岩春日満つ
鶴衆の名付けて波郷椿かな
ライカシヤッター春の愁ひの音すなり
ゆく春の胸のピンポン玉が掌に
緑さす屏風仕立ての波郷の書
伊予ことば二つ覚ゆる夕ざくら
縁かな瀬戸の真鯛に酒を酌み
春星や酒中花根付かぬ話など
青萩に風は呼ばるるやうにかな
白雪芥子咲かせ一草なき芝生
黒揚羽写真の中へ加はりて
俳号を「茶話」と応へて涼しかり

あたご道

浅田 光代

みささぎの杉より春の雪しづり
早蕨やみささぎ守る三十戸
みささぎ守箒を肩に花きぶし
うぐひすや苔の湿りの明智越
露味噌や舌に太陽ひろがりぬ
いたどりを手にあたご道下りけり
楠の葉のやはらかな照り涅槃寺
まつ先に早稲が火を噴くお松明
お松明火の粉の海に立ち並ぶ
火柱に春満月のゆがみたる
お松明炎抱きしまま倒る
くすぶれる一柱胸に涅槃の夜
父の忌のみささぎの山さくら噴く
山門に種物ひろげ嵯峨の鉦
口上のいと短けれ嵯峨念仏



◇特別作品◇(抄)

小さな秋

島田 和子

酔芙蓉未だ約束の果たせずに
浅黄色のテーブルクロス今朝の秋
散水のホースの先に秋立てり
初秋の声にならないこゑを聴く
露草の露を染めぬる朝かな
日本大通り風の抜け来る秋初め
処暑の海大棧橋に見てゐたり
秋風に背中押さるる気配かな
結界の奥に秋蝶見失ふ
稲光に決断の勇氣もらひけり

風土独語／神蔵 器



肉筆の棟方志功美人図水蜜桃

安永 圭子

古い話になるが、私が俳句をはじめ、最初に投句したのは、北海道函館の齋藤玄主宰「壺」であった。「壺」は敗戦後間のないう昭和二十年十二月（創刊は昭和十五年）にいち早く復刊した。私が投句したのは昭和二十二年のはじめで、その頃「壺」の表紙は棟方志功のものであった。おそらく復刊から二十三年の三年間であったと思うが、美人の顔だけのものであった。志功独特の美人画で、後年の「門世の柵」や「沢瀉の柵」とそっくりな健康的で丸顔、頬が紅く、眉の下、そして筆の先でちよつと置いたような下唇、やわらかく豊かで濃艶でさえあった。

全くお恥かしいことだが、その頃、私は志功といえば版画家（志功は版画を板画と改めている）とばかり思っていたので、「壺」の表紙も版画と思ひ疑うようなことはなかった。六十年も経って今さらおかしいことだが、安永さんの掲出句「肉筆の棟方志功美人図」の「肉筆」にはと胸を突かれた。「壺」のあの表紙は版画ではなく志功の肉筆であったのではないか。

志功は肉筆画のことを「倭画（やまとが）」と称していた。小学校の頃より友達にせがまれると気軽に筆を走らせる志功であったそうである。色紙のようなものを含ませれば、志功の肉筆は相当の数になるという。

敗戦直後、目的も希望も失って、人も物も荒廃した中、「壺」

の復刊にあたって、ささやかな俳誌であったが、齋藤玄が棟方志功に表紙の画を依頼したその心のうちは痛いほどよく解る。やっぱり、「壺」の表紙は志功の肉筆だったのだ。

前置きが長くなってしまったが、安永さんの句の「水蜜桃」は見事な表現である。「桃」でもよいのだが、桃では感覚的に固さが残る。

昔、ある作家が自殺した。遺書は無かった。作家の坐っていたあたりに何枚も、いや何十枚も作品の題名だけを書いた原稿の反故がまるめて捨てられ、蓮の花のように咲いていた。作家の最後まで真向かっていた机の上の原稿用紙には「女菩薩」とのみ書かれてあった。志功の肉筆画は水蜜桃のような美人女菩薩である。

呪文にも飛ばぬ絨毯油照 柿沼 盟子

油照りはじつとしていても汗が滲み出るような蒸し暑さで、何とも耐え難い。こんな日はいつそ魔法の絨毯で涼しいところへ逃避行としゃれたいところだ。ところがその魔法の絨毯もあまりの重苦しい暑さに参っているのか、いくら呪文をと覚えても、さっぱり効き目がなく絨毯は微動だにしない。

児童劇にすぐれた女優さんらしく「魔法の絨毯」を逆手にとって暑苦しさも吹き飛ばす楽しい句になった。（以下略）

風土集



神蔵器選

ドンキホーテの槍炎天に草田男忌
噴水の天辺にある涅槃かな

川崎

豎山 道助

一千万円数へし機械涼しかり
かなかなや柩は死者の仮の宿
韻文の書に囲まれて秋に住む
月夜かな無言で夫に手をとられ

東京

奥田 茶々

夫の胸にナース手向けしガーベラー
フアックスで賜る戒名月涼し
雲の峰季寄せ片手に逝きたまふ
さよならと流星の海抜き手きり

高槻

浅田 光代

さがり目のうから揃ひて墓洗ふ
魂棚を覗く児父を楯として
つる草の地を這ふ八月十五日
流灯のひしめき来りとどまれり
灯の消えし流灯を追ふまなかな

気ぜはしく鳴く大阪の油蟬
天平の礎石の上の桐一葉
魚めきて七夕竹をくぐりゆく
哲学の道にほうたる掌に囲む

横浜

中村 洋子

電球を一つ取替ふ終戦日
教会の壁に十戒今朝の秋
七夕竹本気の願ひひとつかけ
ふる里に帰らぬと決め髪洗ふ
駅までの古本市や片蔭

横須賀

平田紀美子

十人の反戦デモ隊白日傘
名月や名も無き寺の清水汲む
秋風や比叡の山を際立たす
秋に来て見れば鴨川秋の川
乳母車に身じろぎもせぬ赤蜻蛉

京都

杉本葉子

湯河原旅館「端月」

山の上の虹に登らむ雲の湧く